

(事例) 商店街では地震後、余震もあり外に出て立ち話する人が多く、まとまって被災することになってしまった。

(事例) 建物は割と健在だったため、営業再開のため店の後片付けに夢中になり外の情報(消防団の避難呼びかけ、ラジオニュースなど)を確認しなかったために被災した。後片付けなどの目の前の作業に没頭することでかえって安心感が生まれるという。

(事例) 津波は事前の引き波とセットという俗説があり、水路の水位変化をラジオも聴かず立ち話をしながら観察していて被災した。当時は干潮時であり津波による引き波か干潮による水位低下かわからなかったが、皆といる安心感もあり決断できなかったという。

(事例) 地震の後は外に出るより家の中が安全と判断して逃げなかった。防災無線の故障もあり消防団の呼びかけも聞こえなかったという。

(事例) 避難先の公民館で被災～避難計画が宮城県沖地震を想定していたため想定以上の津波来襲により被災。

高齢者避難誘導について

(事例) 地区の自治会長が高齢者宅の避難説得に時間を取られ被災。自分の避難判断を誤ってしまった。

なぜ逃げることができた？

(事例) 閑上保育園は地震後 10 分で万一のことを心配して避難開始。避難先の小学校到着後 30 分で津波到達。保育園には避難先を張り出したので迎えに来た親も避難先へ行き助かった。親は子供に振り回されるものだと認識した。

最初の食糧(おにぎり 1 個)が来たのは 2 日目

岩手県山田町からの避難者佐々木弘子さんは避難所の生活について DVD 取材映像で説明。

避難所に最初の食糧(おにぎり 1 個)がとどいたのは 2 日目。毛布はもっと遅れて寒かった。トイレはみんなで校庭を掘って囲いを作ってしのい

だ。食糧、寒さが問題だったという。ただ、水は沢水が使えたので不便はなかったという。

東海地方ではどんな問題が？

会場からは名古屋のような都会では個人情報保護法のため避難援護者名簿も作れない。南西部のゼロメートル地帯住民は東部の高台に避難することになるがお互い顔の見えない関係なので避難所の運営が心配。豊田市の地区では名簿を整備し、避難訓練を行っており行政からも評価されている。国土交通省労組からは、被災後の自衛隊、消防の活動はマスコミに紹介されているが、彼らが活動できるように道路警戒、排水作業に全国から建設関係者が集まったことを知ってほしいとの話がだされ、今後も継続的にフォーラムを開催することとなった。

名古屋市の場合、災害は複雑になる。地震で倒壊家屋が道をふさぎ、家具倒壊でゲガ人続出、火災発生、液状化で水道・道路などインフラ被災。津波で大量の避難民発生。道路は避難者の車で大渋滞し救助活動の妨げとなる、スーパー、コンビニ大混乱・・・など心配の種は尽きない。

マンションなどの高層建築に住んでいるのなら、とりあえず動かないほうがいい可能性も高い。

家の中のことは行政も含めて第三者にはわからないので、まずは自分で被災時の準備をするしかない。

今回のようなフォーラムはそのための参考になる。

事務局：山本